

## 2024年度「神戸女学院の100冊」書評コンテスト 講評

毎年実施している「神戸女学院の100冊」書評コンテストに、今年度は3編の応募があり、各分野の専門の先生方による厳正な審査などを経て、優秀賞1編、佳作2編が選ばれました。残念ながら、今年度は最優秀賞に該当する作品はありませんでした。

優秀賞に選ばれた矢野心香さん（音楽学部音楽学科1年生）は、神谷美恵子『生きがいについて』（みすず書房、1966年）を選ばれました。この本は、精神科医であり、神戸女学院大学教授も務めた著者が、ハンセン病患者との触れ合いを通して「生きがい」について考えた作品で、出版から60年近くを経た今なお読み継がれている名著です。

矢野さんはまず、同書が「生きがいを感じるためには」、「生きがいを喪失するとき」、「新しい生きがいの発見」の3つの部分から構成されていることを指摘し、それぞれの内容を簡潔に整理されます。その上で、著者の言う「生きがい」には、矛盾する2つの用法があると切り込まれます。すなわち、前半部分の「生きがい」は主体的・積極的に自らの力で見つけるものであるのに対して、後半部分の「生きがい」は主体的、積極的になることのできない人々にとっての生きがい、つまり生きる意味としての「生きがい」について述べられているとし、そこにキリスト教の思想につながるものがあることを見い出されます。矢野さんは、この2つの「生きがい」をはじめ「矛盾」という言葉で捉えられますが、これらは相反するものではなく、「自分の使命や価値を認識することで自発的に『生きがい』を見つけ、そのうえで、全ての人間が平等に保有する生きる意味、「生きがい」を認識することで、私たちは絶望のうちに希望を見出すことができるのではないだろうか」（傍点は講評者による）と、最後は両者を止揚する見通しを述べて書評を締めくくられています。

全体の構成を概括的に整理した上で、自分なりの視角から筆者の言いたいこと——本書の意義を明らかにするという、オーソドックスな書評のスタイルによって叙述されており、内容だけでなく構成の面からも、応募作中もっとも完成度の高い書評であったと評価できます。

佳作に選ばれた吉田帰蝶さん（文学部英文学科2年生）さんは、マーク・トウェイン『ハックルベリー・フィンの冒険』（1885年）を選び、英文で書評を書かれました。この作品は、南北戦争直後のアメリカ社会を舞台に、白人の子供ハックと黒人奴隷の子供ジムとが友情を育んでいく物語としてよく知られています。吉田帰蝶さんは、著者の内にある無意識の差別意識を指摘しながら、それでも作品に一貫して流れている奴隷制度への疑問、人種差別への反対の思想を読み取って行かれます。それとともに、二人の子供の言葉（英語）の違いを巧妙に訳し分けられている柴田元幸氏（2017年、研究社）の翻訳に注目されたところがユニークでした。

同じく佳作に選ばれた吉田琴音さん（文学部総合文化学科4年生）は、優秀賞の矢野心香さんと同じ神谷美恵子『生きがいについて』を選ばれました。吉田琴音さんの書評は、関連図書やこの作品について論じた先行研究を参照しながら、内容を丁寧にトレースして

いくスタイルに特徴があります。また、この作品には訓示的な表現が少なく、「自分自身で一から生きがいについて考えていくような、能動的な読み方を積極的に行う態度が求められる」と、作品への向き合い方を示唆しているところが特徴的でした。

佳作の2作品は、いずれも各評者の独自の視点がよく現れた力作でしたが、作品の評としてのオリジナル性がやや弱く感じられる点、また構成がやや甘く論点がわかりにくくなっている点で、課題があるように思いました。

書評とは「読書感想文」ではありませんので、評者の側がしっかりとした「構え」をもって書かなければ、凡庸なものになってしまいます。つまり、その作品だけ読んだだけでは書評にはならず、それまでに自分が読んできたものの蓄積が、評者独自の「構え」となって、読みごたえのある書評を生み出していきます。その意味で、日頃の読書量こそが重要であることを、この場で改めて強調しておきたいと思います。

「神戸女学院の100冊」は、人文科学、社会科学、芸術学、自然科学にわたる神戸女学院大学の19の専門分野から本学教員が選んだ95冊に院長推薦の5冊を加えた、本学学生が一つの分野に縛られず自由に学びを広め、さらに自分自身のための専門を作るという、リベラルアーツ教育の基盤を作ってもらうための道標となるための図書です（神戸女学院大学Webページより）。

残念ながら、近年は書評コンテストの応募数が減っており、寂しい限りです。大学での学びの基礎として、学生のみなさんが読書の習慣を身につけ、積極的に応募して下さることを期待しています。

2025年1月10日（金）

教務部長・文学部総合文化学科教授

河島 真